

平安京近郊洛西窯における緑釉陶器生産

——編年と構成要素の再検討——

高橋 照彦

はじめに

緑釉陶器は、主成分の珪酸鉛に呈色剤の酸化銅を加えて緑色に発色する上薬が施された焼物で、日本古代の国産窯業では最高級製品に当たる。平安時代初期の生産地は平安京近郊であったが、後に東海（尾張・三河・美濃）、防長（長門・周防）、近江などに生産地が広がることになる。

平安京近郊における緑釉陶器生産地は、京都市左京区・北区の洛北（岩倉・西賀茂）窯跡群、京都市西京区の洛西（大原野）窯跡群、京都府亀岡市の篠窯跡群が、主要三大生産地である。この他に、大阪府吹田市の吉志部（岸部）窯跡群などでも緑釉陶器生産が行われていた（図1）。

平安京近郊での緑釉陶器の生産動向としては、まず遷都直後に瓦の生産に付随するように、北郊の洛北窯や淀川流域の吉志部窯などで緑釉陶器が生産されたが、その後の9世紀中頃には本稿で扱う大原野周辺の洛西窯でも生産が展開し、9世紀末には丹波の篠窯に技術拡散をみせた。洛西窯の

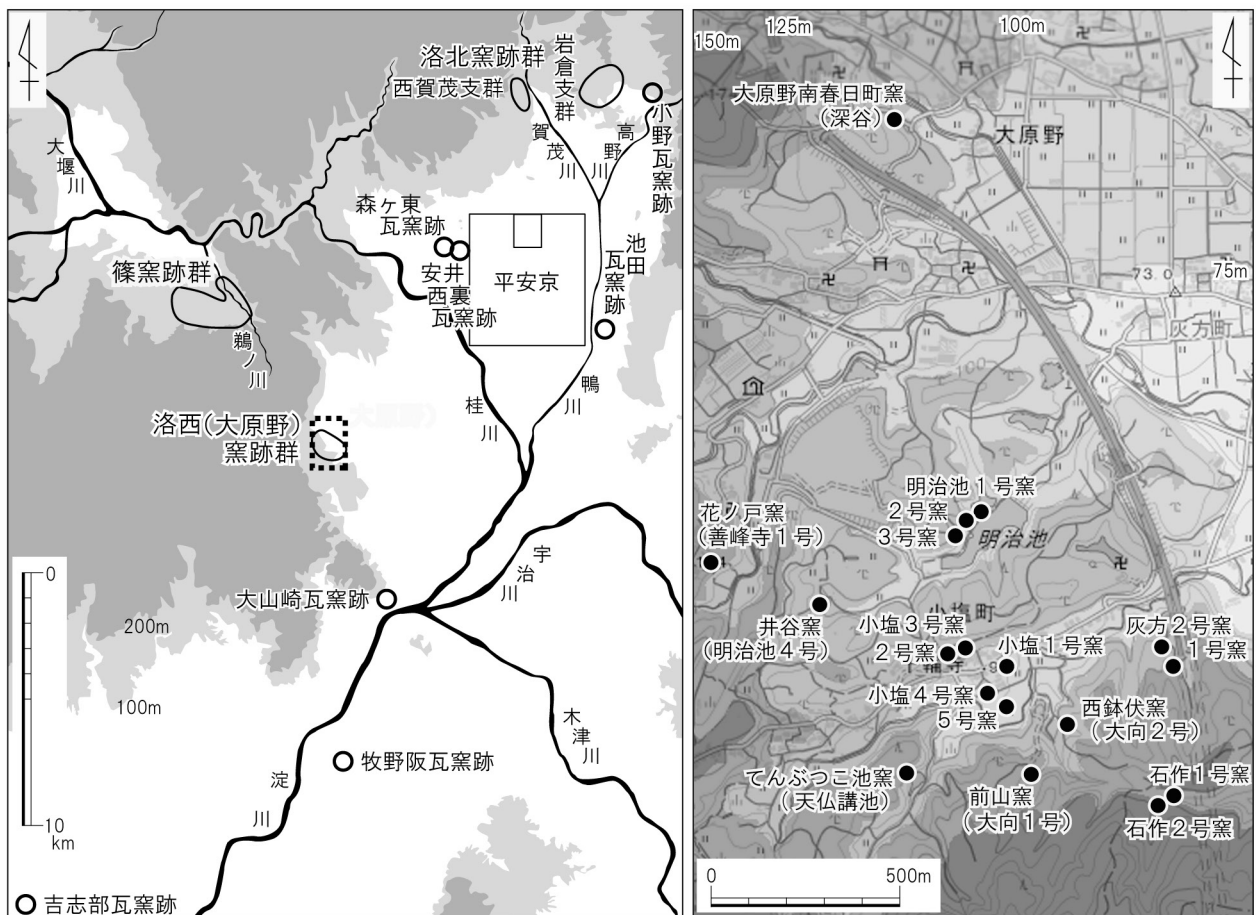


図1 平安京近郊の主要窯跡と洛西諸窯の分布（左：1/300,000、右：1/20,000）

成立は、緑釉陶器が量産期を迎えて平安京をはじめ全国に供給される大きな画期を示している。

以下では、平安京近郊で作られた緑釉陶器の生産実態の解明を課題とするが、検討が不十分な洛西窯を中心に上げ、編年的な再整理や構成諸要素の起源の解明などを試みてみたい¹⁾。

1 窯構造と生産内容——石作窯と灰方窯——

まず、以前の拙論〔高橋 2003〕以降に発掘された灰方窯〔京都市埋文研 2010〕に関して、基礎的事項を確認しておく。灰方窯では 2009～2010 年の調査で窖窯 2 基が発見された。洛西でも早くに発掘された石作窯は小型三角窯で異なる窯構造だが、操業時期は同時期の 9 世紀第 3 四半期頃と推測される。灰方窯出土品は緑釉陶器素地がほとんどで、わずかに須恵器なども出土している (図 4)。

ここで確認したいのは、灰方窯の生産内容とその性格の評価である。灰方窯ではトチン (図 2-6、図 3-40 参照)・匣鉢 (図 3-42 参照) といった窯道具類が出土していないことなどから、報告書では灰方窯が緑釉陶器素地と須恵器の焼成窯と判定されて、別の小型三角窯で施釉品が焼き分けられていたものと結論付けられている〔京都市埋文研 2010〕²⁾。ただ、灰方窯の調査では広く調査されたにもかかわらず、灰方窯のごく近接地では二次焼成窯を確認できなかった。

まず注意すべきは、9 世紀後半以降の緑釉陶器をみれば明らかなように、トチンを使わないことが通例になり、灰方窯からの窯道具の有無は必ずしも緑釉陶器を焼成していないことを示す根拠にはならない点である。また、小型三角窯である石作窯〔古代学協会 2020〕の出土品も大半を占めるのが緑釉陶器素地であり、その他の小型三角窯でも同様である。緑釉陶器の焼成温度ではそもそもそれほど失敗品が出ない。しかも、灰方窯においてはごくわずかながらも緑釉陶器が出土していることから、これらの窖窯で緑釉陶器も焼成したことを考えるのがむしろ自然であろう³⁾。

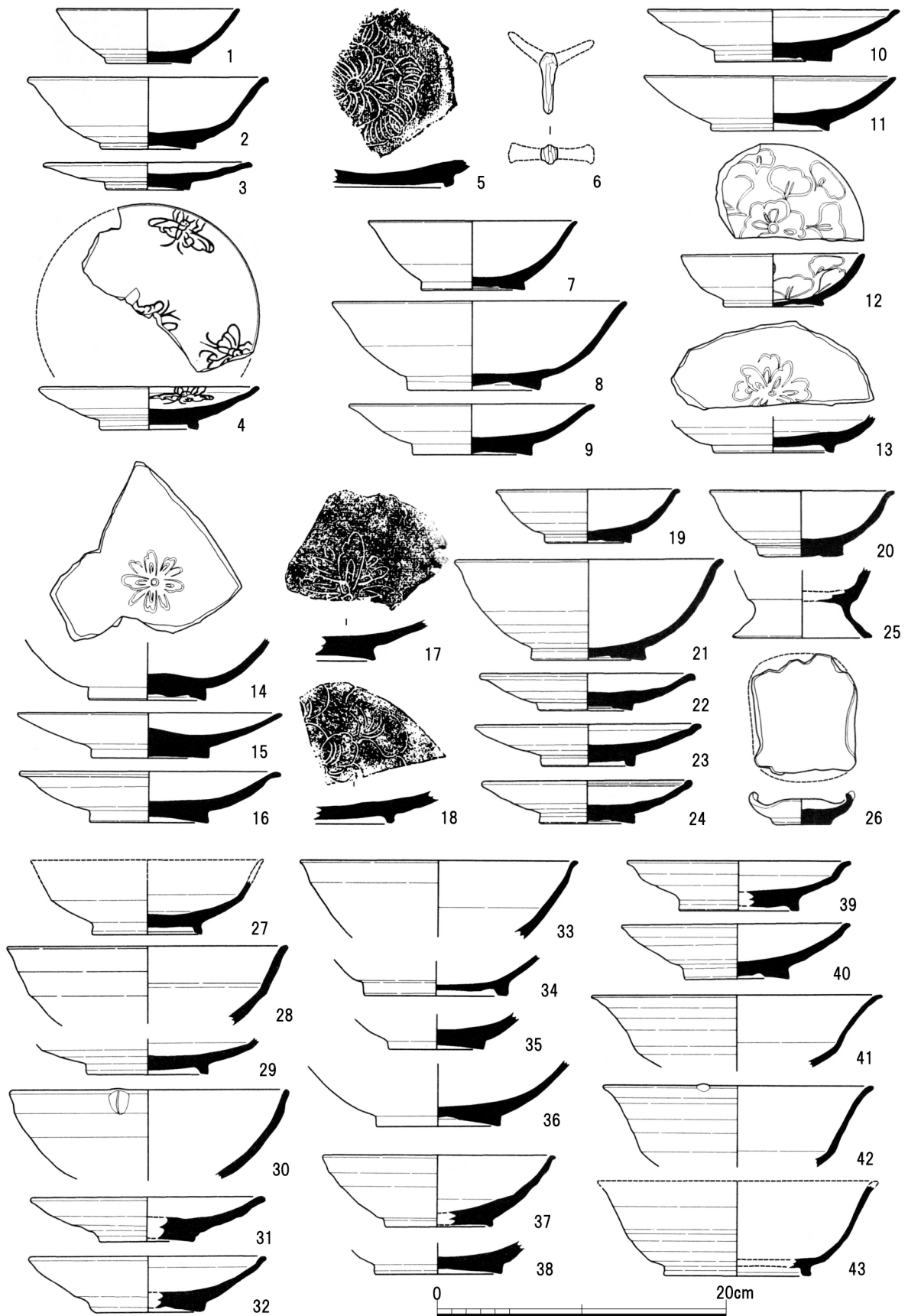
丹波の篠窯においても、かつては緑釉陶器窯として小型三角窯しか知られていなかったが、大阪大学の発掘調査により、9 世紀末の篠窯初期の緑釉陶器窯である大谷 3 号窯は窖窯であることが判明した〔大阪大学 2012〕。その事例と同様の成果として、灰方窯が位置づけられるであろう。

これまで平安京近郊の洛西窯や篠窯では、緑釉陶器は小型の窯で焼かれていたというイメージが強かったが、固定観念で捉えるべきではない。篠窯以外の地域でも、洛北では栗栖野 3 号窯〔京都市埋文研 1986〕などのように窖窯で緑釉陶器を焼成しており、東海の窯でも岩崎 24 号窯〔日進町教委 1984〕をはじめ窖窯での事例は少なくない。つまり、灰方窯や大谷 3 号窯において窖窯で緑釉陶器を焼成していたことは、必ずしも孤立した事例だとは言えず、むしろ日本古代緑釉陶器生産においては普遍的なあり方を示していると評価すべきである。

2 洛西における緑釉陶器窯の変遷

次に、編年の問題を取り上げる。筆者は、既に平安京近郊の緑釉陶器窯の変遷や、生産された椀皿類の変遷について検討しているが〔高橋 2003 ほか〕、新たに灰方窯の発掘調査や石作窯の報告書の刊行もなされたため、調査が進展した篠窯も含めて、改めて検討を加えることにしたい。

洛西窯 (図 1) に関する既往の編年研究を振り返ると、百瀬正恒氏は洛北・洛西の窯に関して、以下の変遷観を示していた〔百瀬 1986〕。A 期 (栗栖野 13・20 号窯) → B-a 期 (妙満寺境内窯、石作 1・



1~6:小塩1号窯(古)、7~13:西鉢伏窯(大向2号窯)、14~16:前山窯(大向1号窯)、
17・18:小塩4号窯、19~26:小塩5号窯、27~32:てんぶつこ池(天仏講池)窯、
33~36:小塩2・3号窯、37・38:明治池4号窯、39~43:小塩1号窯(新)

図2 洛西各窯出土遺物

2号窯、小塩5号窯)→C(-a・b)期(小塩1号窯)である。その後、前川要氏は篠窯も含めて以下の変遷観を示した〔前川1989a・b〕。栗栖野窯→妙満寺境内窯→本山窯・石作窯→小塩No.60トレンチ→前山2・3号窯→黒岩1号窯→(+)である⁴⁾。これらは、おそらく洛北から洛西、篠へという一系列的な変遷観が念頭にあったのではないかと思われる。

その後、上村和直氏は、年表の中で窯の操業幅を示している。ここではかなり単純化した図式化(→は併行しつつ先後する関係、⇒は併行しない先後関係、・はほぼ同時期の意味)により示すが、栗栖野21号窯→栗栖野13号窯⇒本山官山窯→石作1・2号窯⇒妙満寺境内窯・小塩2・3号窯・小塩4・5号窯・大向1・2号窯⇒明治池窯・天仏講池窯→栗栖野3号窯・小塩1号窯・前山2・3号窯→黒岩1号窯という変遷を考える〔上村1994〕⁵⁾。

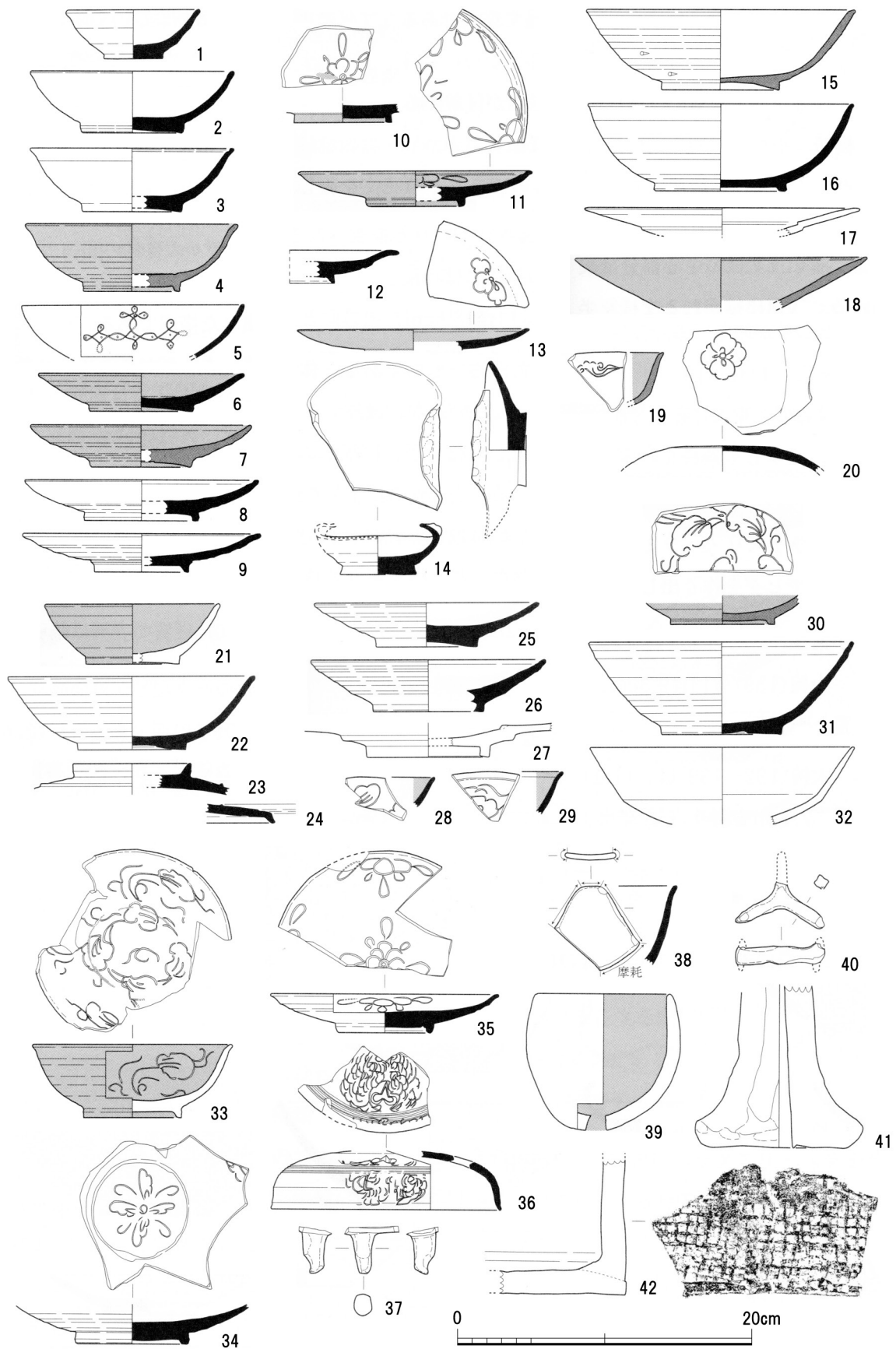
このうち妙満寺境内窯〔坂東善平ほか1970、京都市埋文研1980a〕と石作窯〔古代学協会2020ほか〕や本山官山窯〔高橋2020〕との时期的な先後関係については、意見の相違がみられる。別稿〔高橋2020ほか〕で詳論したので結論だけを記すが、妙満寺境内窯は稜椀や稜皿(E類)が多く、明確な押圧による輪花の皿(F類)が認められる点、円盤状高台の減少などから、石作窯や本山官山窯より明らかに後出しており、9世紀末頃の標識として位置づけるべきだと考えている。

また、妙満寺境内窯と小塩5号窯など洛西諸窯との先後についても、前者がほとんど円盤状高台を持たないのに対して、後者は円盤状高台が一定数含まれ、より古い様相である。地域差は考慮すべきだが、器形でも妙満寺境内窯は稜椀・稜皿形態が普及しており、新しい様相である。

この他に、前川氏は小塩の試掘調査No.60トレンチ出土品〔京都市埋文研1982・1983〕を編年基準資料として重視した。この窯では陰刻花文が出土せず、椀皿は輪高台のものが主流である点を特徴としている。この資料は小塩2・3号窯出土品に相当するが、前川氏が図示した資料(図2-33・34)は、比較的薄手の器壁で、輪高台もやや断面台形状をなした形状であり、10世紀前半の篠の前山2・3号窯に近い特徴を有している。また、前川氏が掲出していない資料には、蛇の目高台の比較的厚めの椀(36)もあり、少し古めの様相である。そのため、平尾政幸氏が評価するように平安京Ⅱ中でも新相(9世紀末頃)と置くのも概ね穏当である〔平尾2003〕。ただ、2基の窯の操業時期が先後になり時期幅を持つ可能性なども十分に考慮すべきだろう。いずれにせよ、前川氏が引用した現状の2点の資料(33・34)だけでは基準資料とみなすのに不足が多い点は否めない。

それでは、操業年代では逆順になるが、個別の窯の生産内容を改めてみていく。まず、小塩1号窯〔岩崎1978、百瀬1986ほか〕は、窯の本体が確認されていないが、時期の異なる複数の窯の資料を含むと推測される。出光美術館などで所蔵している主な資料を小塩1号窯(新)(図2-39~43)とするが、京都文化博物館の所蔵資料〔古代学協会2020〕にもこの時期のものが多く、かなり薄手の個体が多く(41~43)、稜椀・稜皿類(39・41・42、筆者分類のE類)が多数を占め、E類の口縁端部に軽い押圧による輪花を施すもの(34)もみられる。これらの様相は、篠窯の前山2・3号窯と近似し、緑釉陶器編年ではⅣ期に相当する。このほかむしろ深椀と呼ぶべき10世紀にみられる器形(43)や、主体の輪高台以外に簡略化した蛇の目高台(40)などもある。

ただし、百瀬正恒氏は小塩1号窯の資料を器壁が厚く蛇の目高台のものをC-a期として、薄手のものをC-b期に区分している〔百瀬1986〕。確かに時期差を有する可能性はあるが、厚手のものも稜椀・稜皿形態を採用し(39)、前山2・3号窯よりも口径が縮小することが多いため、全般にⅣ期でも新段階に位置付けるべきだろう。また、稜の屈曲が鈍いもの(40)も口径は同様であるので、



1～20・38・40：石作窯第1トレンチ（1号窯）、21～29：石作窯第2トレンチ（2号窯）、
30～32：石作窯拡張区、33～37・39・41・42：石作窯その他

図3 石作窯出土遺物（〈断面〉白抜：軟陶、黒塗：硬陶、梨地：中間、〈表面〉トーン：施釉部）

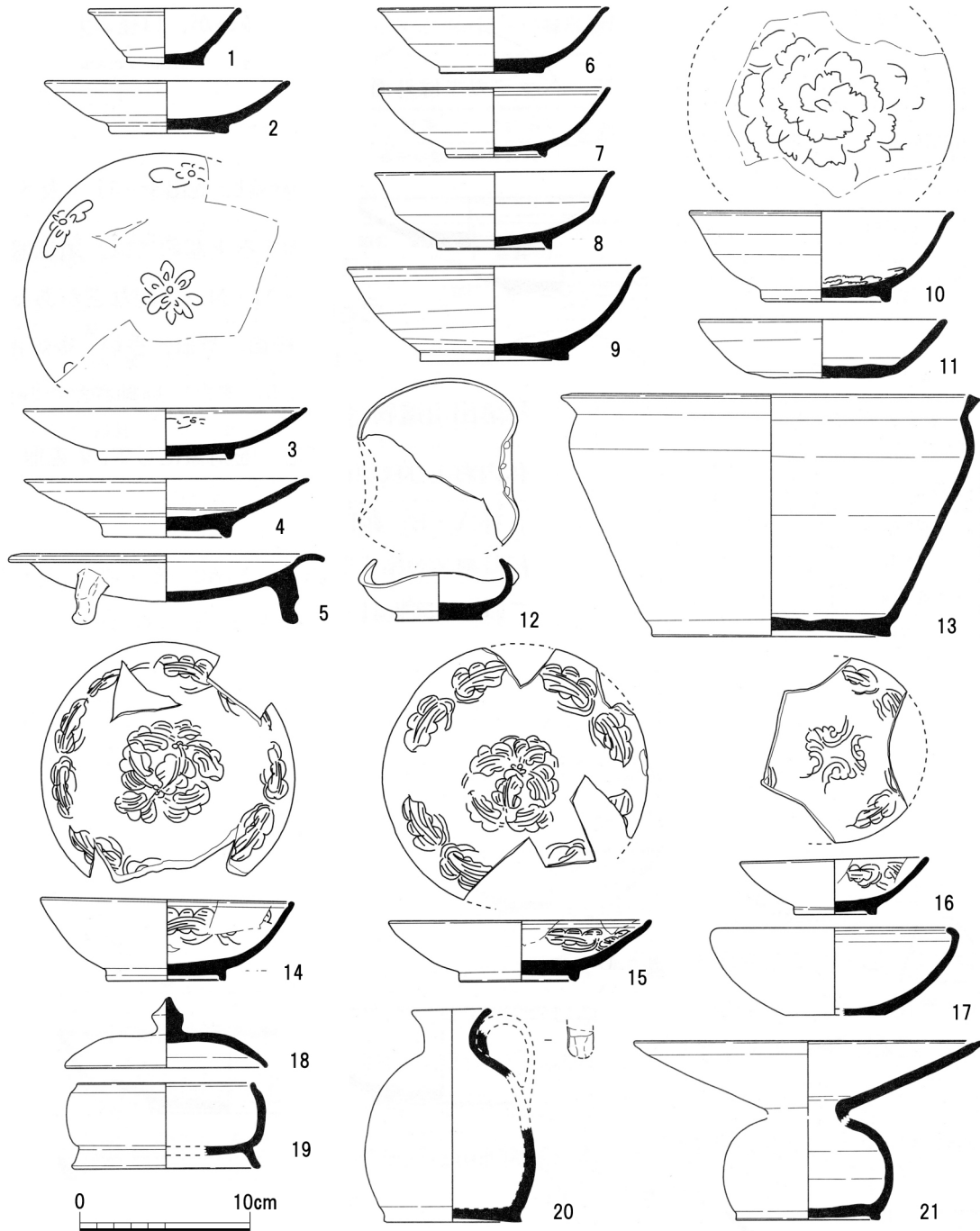


図4 灰方窯出土遺物

時期幅を持つとしてもⅣ期を中心とする資料として小塩1号窯（新）と呼称する。

それに対して、小塩1号窯でも京都市1982年の調査分（1～6）〔京都市埋文研1983〕は、円盤状高台で体部に稜を持たないもの（1～3、筆者分類A類）が主体であり、明らかにⅡ期に遡るもので、近辺からは四足壺なども出土する。この調査分は小塩1号窯（古）として区分しておく。

次に、てんぶつこ池窯（天仏講池窯）〔京都市埋文研1981・1982・1983〕の資料（27～32）は、輪高台が多く（27・29）、蛇の目や円盤状の高台も存在する（23・24）。稜の明瞭な稜椀が目立ち（27～29、E類）、器壁は必ずしも薄いわけではない点で、妙満寺境内窯などⅢ期に類例がある。また口縁部押圧の輪花椀（30）があるが、体部に稜はなく、五輪花椀に当たる筆者分類のF類であったと

表1 平安京近郊緑釉陶器主要窯の編年案

時期区分	略年代	洛北窯ほか	洛西窯	篠窯	篠窯編年
先Ⅰ期	780～810	栗栖野21号窯 吉志部(岸边)窯			篠ⅡC (古)期
Ⅰ期	810～840	栗栖野13号窯 栗栖野20号窯			篠ⅡC (新)期
Ⅱ期古	840～860	本山官山窯	石作1・2号窯 灰方1・2号窯		篠ⅢA期
Ⅱ期新	860～880	尼吹ノ谷窯	西鉢伏窯(大向2号窯) 小塩5号窯		篠ⅢB期
Ⅲ期	880～900	妙満寺境内窯	てんぶつこ池 (天仏講池)窯	大谷3-1・2号窯	篠ⅣA期
Ⅳ期	900～940	栗栖野3号窯	小塩1号窯(新)	前山2・3号窯 小柳4号窯	篠ⅣB期
Ⅴ期古	940～980			黒岩1号窯 西長尾5・6号窯	篠ⅣC期
Ⅴ期新	980～1020	中の谷4号窯		騎馬ヶ谷9号近傍窯 西山1-1・2号窯	篠ⅣD期

みられ、E類の稜椀に輪花が多用されるようになるⅣ期よりも古い様相である。また、稜皿もあるが、口縁端部から屈曲部までの距離が短く、むしろA2類(10・23)の延長の形態が認められる(32)。これらの諸点は篠窯の大谷3号窯でも確認できるため、Ⅲ期の典型的な様相である。

続いて小塩5号窯(19～26)〔京都市埋文研1983〕だが、蛇の目高台(19～22・24)が最も多く、円盤状高台や輪高台が3割程度と同程度を占める。また稜の明瞭な稜皿なども存在するが、きわめて少なく、むしろ端部が外反するA類(22)を主としつつ、口縁端部近くにやや屈曲のあるA2類(23)も目立ち、口縁端部の内面に沈線が施されるC類(24)も認められる。これらの様相は、Ⅲ期よりも古相を示し、Ⅱ期に相当する。ただし、耳皿(26)や皿類(22～24)も口径が小さく、陰刻花文も円盤状高台の製品に広がって文様の粗雑なものを含むなど、やや新しい様相のものが多い。全般に蛇の目高台が多い点なども考慮すれば、Ⅱ期でも新段階の様相とするのがふさわしい。

小塩5号窯に近接する小塩4号窯(17・18)〔京都市埋文研1983〕は、陰刻花文の製品を含むが、石作窯などに類例のあるタイプ(17)は4弁花以外の部分にU字形の表現がみられて、文様がやや崩れている。しかも円盤状高台の製品に陰刻花文が施されており(10)、石作窯などでは輪高台に限られている状況からは規則性が乱れており、小塩5号窯の様相に近い。また、唾壺や段皿などの特殊器種がみられる点も、華瓶(25)・突帯をもつ蓋などがある小塩5号窯と似た様相と言えるが、陰刻花文からすると小塩5号窯よりも少し先行するかもしれない。

西鉢伏窯(大向2号窯)(7～13)〔京都市埋文研1982・1983〕は、各種の高台がみられるが、蛇の目高台(7・8・10)や輪高台(11・13)の量が多くなっているため、小塩5号窯などの様相に近いものとみられる。また陰刻花文(13)は小塩4号窯(17)のものと近似するが、U字状の蕊表現が多用される。椀は外反するA類(7・8)が主体であるが、皿では通例のA類(9)とともに、口縁端部近くで小さく屈曲するA2類(10)、口縁端部内面に沈線がめぐるC類(11)などもある。これらのことから、本窯は小塩4・5号にも近く、Ⅱ期でも新段階のものと判断される。

前山窯(大向1号窯)(14～16)〔京都市埋文研1982・1983〕は西鉢伏窯(大向2号窯)と近似した様相だが、円盤状高台などやや古い様相が目立つ。陰刻花文(14)では、小塩4号窯(17)とも似るが、後述するように灰方窯(3)とも酷似するので、Ⅱ期でも古段階に遡る可能性がある。

石作窯（図3）〔古代学協会2020〕と灰方窯（図4）〔京都市埋文研2010〕は、共通する内容が認められ、操業時期がほぼ併行するものと判断される。いずれも9世紀前半に多数を占める円盤状高台が多く、陰刻製品などに輪高台が目立つものの、輪高台や蛇の目高台は多くない。陰刻文様は全般に精緻であることから、先述の窯より古く、Ⅱ期でも古段階に位置付けられる。

ただし、この2つの窯の陰刻花文をより詳細にみると、石作窯では猿投窯黒笹地区などでみられるU字形の蕊状表現のある花文（13・20）や流麗な雲文（19）も存在する。また、石作窯には楕円形状の花弁をつないだような簡略な花文（10・11・35）もあるが、これも猿投窯に一般的な二重花弁の宝相華文と構成が一致し、口縁部の4箇所配する半截花文とも共通している。それに対して灰方窯では猿投にみられない大型花文（10）など異質性がある。さらに、後でも検討するが、葉が旋回するような文様（30・33）では灰方窯（14・15）のものがやや粗雑な感がある。

この他、やや時期が後出する前山窯（大向1号窯）・西鉢伏窯（大向2号窯）・小塩5号窯の出土品と酷似する粗雑な花文（図2-13・14・17）が石作窯（図3-34）や灰方窯（図4-3）でもわずかに出土している。石作窯ではU字形の蕊状の表現を持つ4弁の間に間弁を配しており、猿投窯と同様の花文として自然な表現であるが、灰方窯や前山窯（大向1号窯）ではU字形の蕊状表現が5カ所程度にみられ、やや粗雑化しており、西鉢伏窯（大向2号窯）・小塩5号窯では蕊状表現がさらに多くなっている。この花文の粗雑化や他の陰刻文様の構成を重視すると、併存して操業する可能性はあるものの、様相的には石作窯に比べて灰方窯がやや新しいものと推測すべきだろう。

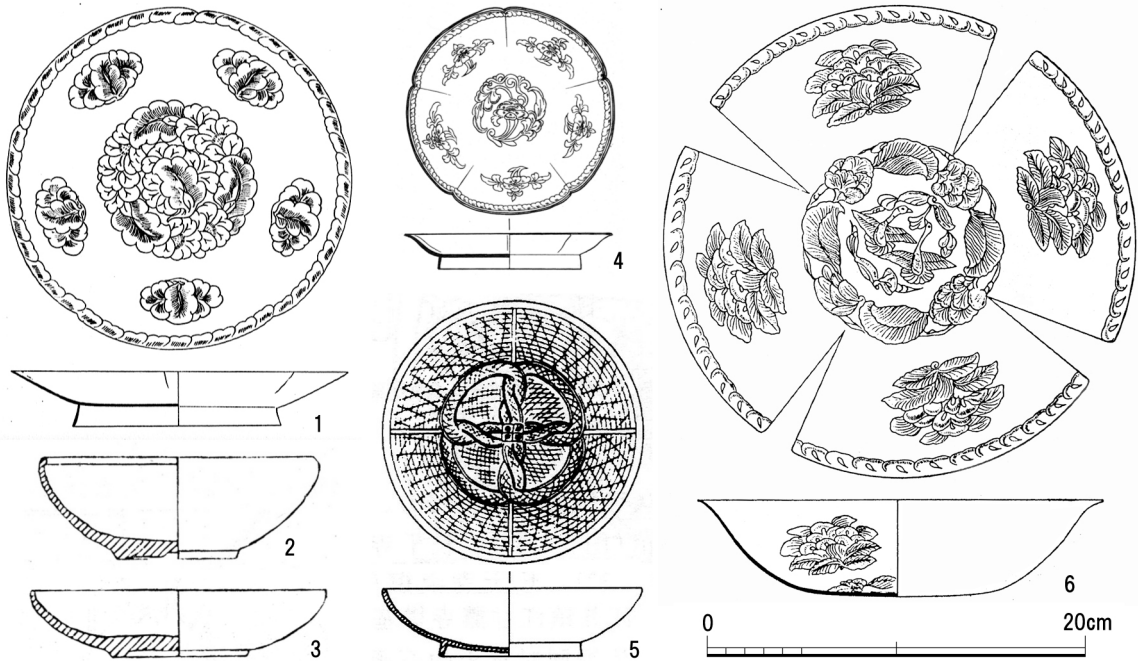
この他、明治池窯周辺では複数基の窯が発見されているが〔吉村1981〕、洛西では珍しく須恵器が主な製品であり、須恵器の供膳具や玉縁口縁を含む鉢類などもあって。9世紀後半～10世紀前半まで操業していた。井谷窯（明治池4号窯）（37・38）〔京都市埋文研1983〕では緑釉陶器素地などが採集されており、円盤状高台の底部（38）を含むことから、9世紀中頃、Ⅱ期段階に操業していたのだろう。この他にも花ノ戸窯（善峰寺1号窯）や大原野南春日町窯（深谷窯）などでも素地が出土しており、緑釉陶器が生産されていた可能性がある〔京都市埋文研1980b・1983ほか〕。

以上をふまえて筆者の時期区分をもとに洛西の主な緑釉陶器窯を整理すれば、Ⅱ期古段階として石作1・2号窯、灰方1・2号窯、Ⅱ期新段階として西鉢伏窯（大向2号窯）、小塩5号窯、Ⅲ期にてんぶつこ池（天仏講池）窯、Ⅳ期に小塩1号窯（新）となる。他の平安京近郊窯との併行関係も示すと、表1の通りになる。表1には、おおよそその実年代〔高橋2003〕や篠の編年〔大阪大学2024ほか〕との対応も、参考までに示しておく⁶⁾。

3 陰刻文装飾とそのモデル

続いて、緑釉陶器の陰刻文装飾を取り上げる。9世紀前半頃の平安京近郊の窯では、耳皿などに陰刻文様を施していた例はあるものの、基本的には陰刻による装飾は採用されていない。同時期の東海地域、とりわけ猿投窯では、精緻な陰刻文様が多用されていることと比較すると、大きな差異がある。なお、9世紀前半の平安京近郊窯では、黄緑色釉を全面に施した後に口縁の端部などに濃緑色釉を点彩する、いわゆる緑彩の技法が少数ながら確認されているが、そのような緑彩手法は同時期の東海にはほとんど認められず、長門で製作されたものには多いなど地域色が顕著である。

このように陰刻文様がほとんど採用されていなかった平安京近郊窯の緑釉陶器において、初めて



1：陝西省耀県柳林背陰村出土、2・3：浙江省寧波和義路出土、4：陝西省扶鳳県法門寺出土、
5：河南省洛陽伊川「齊国太夫人」墓出土、6：陝西省西安西北工業大学基建工地出土

図5 石作窯出土品と対比できる唐代金銀器（1・4～6）と越窯系青磁（2・3）

本格的に陰刻装飾を取り入れたのが、洛西の石作窯（図3）や灰方窯（図4）である。緑釉陶器の陰刻文様に関しては、かつて吉田恵二氏が包括的な議論を試みている（吉田1983ほか）。吉田氏は、陰刻花文を集成・分類して変遷観を示したが、結論的には、東海の諸窯の事例に比して石作窯のものは文様が稚拙で、要素が欠落していることなどから、石作窯が時期的に新しいものとみなした。しかしながら、消費地での出土状況の検討などにより、必ずしも吉田氏の想定するほどに石作窯の時期が下がるものではなく、むしろ産地差や工人差を考慮に入れる必要がある。ただ、陰刻花文の採用において、猿投窯が平安京近郊諸窯一般に先行して精緻な文様を採用していることは確かであり、吉田氏や田辺征夫氏などが早くに指摘したように、猿投窯の新手法の導入には画師や画工、あるいは陰刻文を施す金属器製作工人が素地生産に参入していたのだろう。

そのような東海の製品と比べてみると、石作窯や灰方窯の陰刻文は確かに全般には稚拙な文様と評価できる。また、両者に類似する文様もあり、その採用には先行する猿投窯の陰刻文を模倣していた可能性もある。しかしながら、必ずしもすべての文様が猿投窯製品の模倣、あるいは同一モデルをもとにしていたとは言えない。とりわけ注目したいのは、葉を旋回するように配した文様である（図3-30・33、図4-14・15）。このような文様は、同時代の唐の金銀器に採用されているが、東海産を含めて他の産地の緑釉陶器ではほとんど確認ができない。そのため、この文様は洛西地域で独自に金銀器などの文様を取り入れて製作されていた可能性が高い。

具体的に石作窯出土品と中国の銀器〔鎮江市博ほか1985ほか〕の文様を比較してみると、前者には著しい簡略化があるものの、例えば陝西省耀県柳林背陰村窖藏出土の銀盤（図5-1）とはほぼ酷似する文様構成だと評価できる。この銀盤には「塩鉄使臣敬晦進十二」の刻字があり、敬晦の在任は大和3年（849）4月から大和5年（851）2月までとされる。同種の文様は、法門寺出土の銀盤にもある（4）〔陝西省考古研ほか2007〕。その地宮出土品には咸通9年（868）から咸通12年（871）の銘文が

あり、同時に納められた法門寺随真身衣物帳も、咸通15年(874)の年紀を示している。この他、陝西省藍田県楊家溝窖藏出土の銀碗蓋についても、同様の文様を確認できるが、上述の法門寺の器物にも信奉品を含む「李杆進」の銘があるため、やはり同様に9世紀第3四半期頃のものとして推測されている。このように、石作窯の陰刻文様は、ほぼ同時期の唐代金銀器にも流行していた文様を模倣しているものと判断できる。

しかも、この種の文様は、8世紀代には陝西省西安南郊西北工業大学窖藏出土品(6)などにみられるように、基本的に鳥獸や柘榴などとの組み合わせであったのに対し、9世紀にはそれらを伴わないものが出現しており、その構成からみても石作窯などのものは9世紀代の金銀器に酷似する。また、金銀器では輪花装飾により8世紀代は偶数に分割されることが多いのに対して、9世紀後半頃からは5輪花のものが増加していくが、先の葉文の旋回する文様を有する銀器は5輪花がほとんどであることから、9世紀、おそらく中頃近くからそのような文様構成のものが流行していることを推測させる。つまり、石作窯などの葉が旋回するような陰刻文については、文様の稚拙さなどは否定できないにしても、最新の金銀器の様相が反映しているとみるのがふさわしい。

さらに興味深いことは、中国陶磁器との対比結果である。浙江省で生産された越窯などでも、やはり金銀器の影響を受けて陰刻の文様が描かれることが多い。ただ、越窯青磁の文様は概して粗雑であり、それと比較すれば石作窯などについても表現が劣る製品とみなす必要もない。

ここでむしろ注目したいのは、越窯青磁では多様な陰刻文様が描かれるものの、金銀器に一般的な葉文を環状に構成するものは9世紀ではほとんど認められない点である。唐滅亡後のいわゆる五代(呉越)・北宋期の10世紀以降には細緻に文様が彫られることも多くなり、唐草状に葉文が配される事例も認められる。つまり、先のような葉文の構成は、越磁にはすぐに普及しなかった可能性が高いのである。その一方で、石作窯などでは、より鋭敏に唐代金銀器の要素を取り入れていたことになる。おそらく、文様などの新たな情報が承和6年(839)の遣唐使の帰国や該期の新羅や唐の商船の往来によってもたらされたのであろうし、その情報を入手できるような上位の権力者が製品内容を指示するなど生産に関与する立場にあったことも示唆する。

4 陰刻文と器形との相関

次に、陰刻文と関係する側面として、器形をみておきたい。灰方窯において特に高台形態に着目してみると、碗皿類では円盤状高台のものが圧倒的に多いにもかかわらず、陰刻文様を持つものは輪高台のものがほとんどである(図5)。それらの陰刻花文を持つ個体は、ヘラミガキも丁寧であると指摘され、この背景として「東海産の緑釉陶器を意識した上級品が生産されていた可能性」が指摘され、「中央官衙の生産規範によるものとは考え難い」とされている〔京都市埋文研2010〕。

しかし、先に指摘した通り、陰刻花文のモチーフは東海地域とは明らかに異にしているものを含み、東海産のみを重視するより中央での新たな唐代文物の情報入手も想定したほうが良い。陰刻文様を有する緑釉陶器が基本的に輪高台で、ミガキも入念であるという作りわけも、猿投指向だけでなく、輪高台で光沢をもつ唐代金銀器を意識した製作であったとすれば納得できるだろう。

9世紀中頃の平安京近郊窯では、口縁部が外反する形態の碗皿類がそれ以前からの継続として生産されているが、それ以外にも口縁端部が内湾する形態のものが新たに出現している(図3-26・31

ほか)。この種の形状は、平安京近郊の製品では特殊な存在ではないのに対し、東海地域では生産量がきわめて少ない。そして、この形態は、中国では河南省洛陽伊川の「斉国太夫人」墓出土の銀碗（図5-5）などに類品がある。この墓主は長慶4年（824）に没したことが知られており、9世紀前半頃の製品である。また、越窯青磁においても9世紀には同様の口縁部形状の製品が認められ（図5-2・3）〔寧波市文物考古所1997〕、当該期の新器形とみてよいだろう。この点をふまえれば、そのような情報もたらされて、日本でも緑釉陶器の新器種として生産されたと推測される。

ここで、篠の大谷3号窯から出土した貼り付け高台の椀Eにも注意しておきたい。その製品は、高台製作手法や釉調などからも東海地域からの技術工人の流入による結果と判断する。ただ、東海の椀Eでは稜の内面にみえる屈曲が明瞭であるのが一般的であるのに対し、大谷三号窯では外面の稜が明瞭であるにもかかわらず、内面がなだらかに続くという特徴もみられる。これは、椀Eの形状のモデルとして、東海製品にのみ引きつけるよりは、むしろ教王護国寺所蔵の金銅鉢など、内面に屈曲が乏しい金属製稜鉢の模倣という側面も無視できない。このように、平安京近郊窯では生産面において多様な要素が複合しつつ製品として結実していることが明らかになる。

従来は、平安京近郊の製品は9世紀後半には量産化され、陰刻文様も粗雑であるため、後出あるいは下位の位置付けが与えられがちではあったが、石作窯や灰方窯では、おそらく当該地域での緑釉陶器生産の開始期であることも手伝って、独自に金銀器などの海外の高級食器をモデルにして新たな製品を生産する取り組みも行われたと推測されるのである。

5 残された課題——素地の硬陶化と双口式小型平窯——

石作窯・灰方窯では、先にみた陰刻文様や新器形の登場などの要素も注目されるが、それ以外の製品の特徴として素地の硬陶化が挙げられる。この背景としては、洛北のような瓦生産との結合から解かれて、須恵器生産とより一体化することが一つの重要な側面であろう。ただ、奈良時代の三彩陶器の段階でも素地製作に須恵器工人の参画があったとみられるので、須恵器工人が関与しても焼き分けが可能なはずであり、須恵器工人のみに起因するとみなすべきではない。

そうなると、例えば緑釉陶器が模倣対象とみなされることが多い青磁などの色調を勘案したことも想定される。そこで石作窯出土品〔古代学協会2020〕の焼き上がりについて実測個体に限るが整理してみると（図6）、素地では8割程度が硬陶であり、緑釉製品でも7割弱が硬陶であるが、そのう

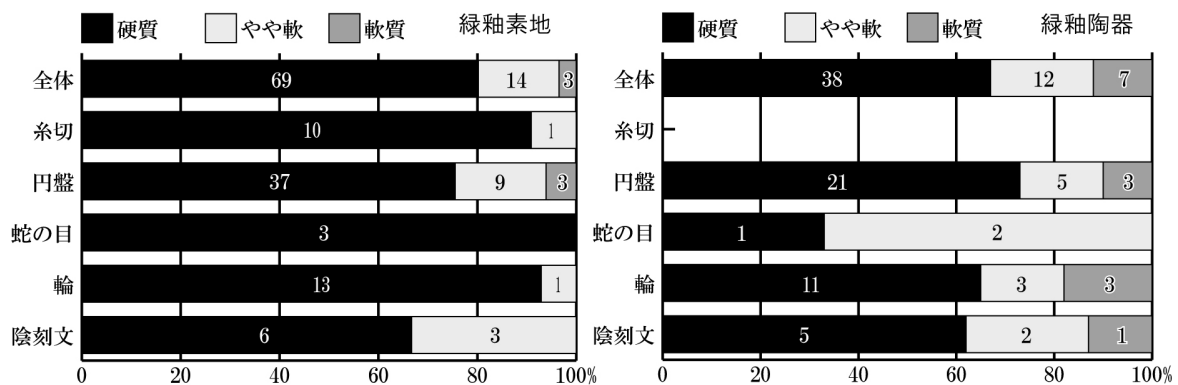


図6 石作窯出土緑釉陶器・素地における高台形態等による焼成状況（数字は実測個体数）

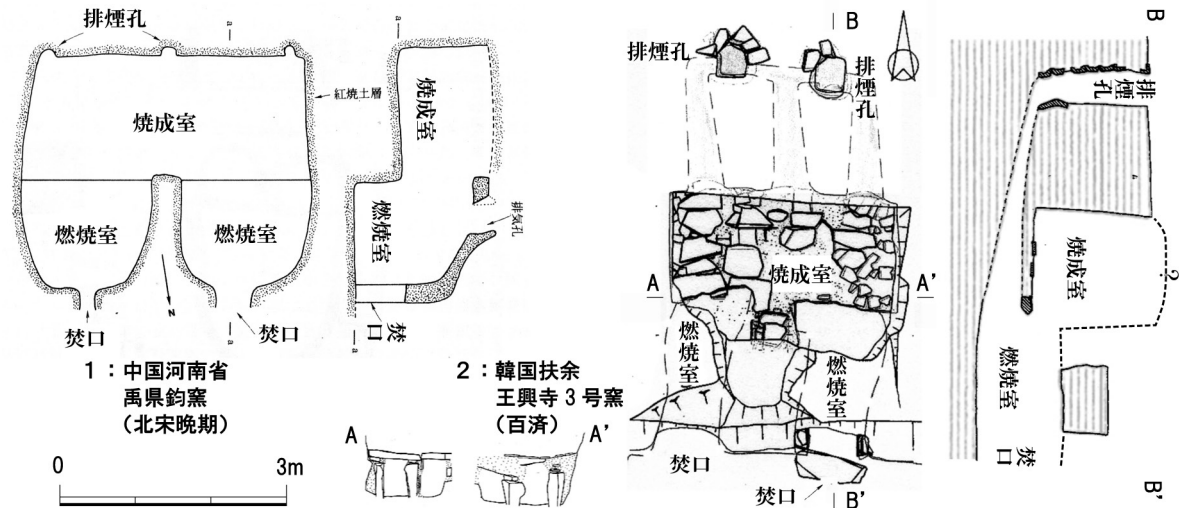


図7 焚口を2つ持つ窯（双口式）の事例

ち円盤状高台のものは素地も施釉品も7割強が硬陶で、全体の個体数も多いので、全体傾向とおおむね一致している。それに対して、例えば輪高台の硬陶は素地では9割で、施釉品では6割程度しもなく、やや軟質あるいは軟質のものが3割強と増加している。これは、輪高台では素地で硬陶のものが破棄されて、むしろ施釉する際には軟質のものが求められていたことを示している。円盤状高台の製品は、その形状からみても模倣対象は陶磁器に求められるのに対して、輪高台のものは陰刻文が施されているなど、先述の通り金属器模倣である可能性が高い。つまり、磁器模倣品は硬陶化がより推進されていたことが指摘できることになり、青磁指向が硬陶化を推進した可能性は十分にある。ただし、9世紀前半では円盤状高台でありながら奈良三彩以来の軟陶で、生産量も少ないことも考えると、緑釉陶器の量産化により日常的な使用に供されることから、それに耐える硬質の製品が求められたという側面も無視できない。いずれにせよ、石作窯の開窯前後に、伝統的な奈良三彩から決別する結果になったことは確かであり、そこに大きな画期がみいだされよう。

また、この石作窯でもう一つ特徴的なのは、いわゆる小型三角窯の採用である。筆者は双口式小型平窯と呼ぶべきものと考えているが、なによりも注目すべきは、焚口が2つ設けられることにある。窯内の構造としては、厳密には不明な場合も少なくないが、床面に円柱状の支柱を立てて、その上に粘土塊などにより棚板状の上部床面を形成し、その上に製品を置いて焼成する構造を確認できる。そして、石作窯以前に操業していた栗栖野窯や吉志部窯では床面に傾斜を持った一般的な窖窯構造しか確認されておらず、現状では当該期以前の日本で双口式小型平窯の類例がない。

そのため、1つの想定として石作窯での独創ということも考えられなくはないが、あまりに特異な構造であることから、陰刻花文や蛇の目高台に認められるような海外の要素は無視できない。ところが、唐代の唐三彩や白磁・青磁などの一般的な窯構造とも異なり、現状では酷似する構造は寡聞にして知らない。ただ、焚口が2つある双口式の窯は中国や朝鮮半島では確認できるため（図7）、それらの発想が間接的であっても導入されていた可能性を考慮しておいてもよいだろう。

例えば韓国の例では、百済の王興寺3号窯は焚口が2ヶ所あり、また棚板状の二重床面の施設を伴うようである〔国立扶餘文化財研究所2007・2014〕。もちろん、時期も異なり、焼成品も瓦であって、しかも百済でも一般的とは言えない構造であるため、施釉陶器の窯として類例が存在するかは今後

の調査成果に待たざるをえない。ただ、基本構造は海外にも皆無ではないことを指摘できるので、日本独自の可能性を完全に否定することはできないが、何らかの海外の情報をもとに、その構造が採用されたと考えておきたい。

以上、洛西の緑釉陶器生産をめぐって、研究上で残された問題のいくつかを論じてみた。いまだ解決のつかない部分もあるが、それらは今後のさらなる調査の進展を待ちたい。

追記

木立雅朗先生には窯業技術について常日頃からご教示を受けるとともに、篠窯の発掘調査に当たってもご指導・ご援助を賜ってきた。篠での小型三角窯復元窯での焼成実験にも参画させていただいて、多くの貴重な体験を得た。木立先生のヴァイタリティーには啓発されるばかりであり、この場を借りて学恩に深く感謝したい。

注

- 1) 本稿は〔高橋 2019〕をもとに、大幅な追補を加えて成稿したものである。
- 2) 石井清司氏も、窖窯で素地の焼成、小型三角窯で施釉後の焼成を想定している〔石井 2017 : p.107〕。なお、各窯の窯構造の実測図などは、紙幅の関係で省略するが、各報告書や論考類を参照されたい。
- 3) この点は旧稿〔高橋 2019〕でも記したが、市川創氏も性格差を重視しつつ、ほぼ同様に緑釉陶器の出土する点にも着目している〔市川 2020〕。
- 4) 前川要氏は、既往の研究をもとに篠窯について前山 2・3 号窯→黒岩 1 号窯→小柳 4 号窯→西長尾 5・6 号窯とするが、この点も異論があり、すでに編年試案を提示している通りである〔高橋 2003・高橋 2024〕。
- 5) 上村和直氏の見解は、筆者が分析した本山官山窯の成果を反映したものである。
- 6) 篠窯の編年区分については石井清司氏の案〔石井 2020〕と多少異なるところがあるが、概ねは一致している。また筆者の緑釉陶器の編年のうち、V 期新は生産内容からみて VI 期と分けるべきかもしれないが、東海系技術の流入が平安京近郊窯で同時期である保証がなく、東海地域など他所ではこの時期に明確な区分が困難であることから、全域的な編年枠を重視して、あえて VI 期には区分していない。

主要引用・参考文献（五十音順、中国語・韓国語文献も日本語読みで配列）

- 石井清司 2017 「緑釉陶器生産の再検討—平安京近郊窯を中心に—」『洛北史学』第 19 号
- 石井清司 2020 「小型三角窯の展開—亀岡市篠窯跡群の場合—」『石作窯・小塩窯発掘調査報告—平安期緑釉陶器・緑釉瓦の多分野協働型研究—』古代学協会
- 市川 創 2020 「考察」『石作窯・小塩窯発掘調査報告—平安期緑釉陶器・緑釉瓦の多分野協働型研究—』古代学協会
- 岩崎 誠 1978 「小塩窯出土の緑釉陶器」『乙訓文化』第 36 号
- 上村和直 1994 「平安京周辺の施釉陶器生産」『古代の土器研究—律令的土器様式の西・東 3 施釉陶器—』古代の土器研究会
- 大阪大学大学院文学研究科考古学研究室 2012 『篠窯跡群大谷 3 号窯の研究』
- 大阪大学大学院人文学研究科考古学研究室 2024 『篠窯跡群西山 1 号窯の研究』
- 京都市埋蔵文化財研究所 1980a 『坂東善平収蔵品目録』
- 京都市埋蔵文化財研究所 1980b 『南春日町窯跡発掘調査の概要—小塩窯跡群に関連する窯跡の調査—』
- 京都市埋蔵文化財研究所 1981 『遺跡確認法の調査研究昭和 54 年度実施報告—山岳・山林地域の遺跡の調査—』
- 京都市埋蔵文化財研究所 1982 『昭和 56 年度京都市内遺跡試掘立会調査概報』京都市文化観光局
- 京都市埋蔵文化財研究所 1983 『昭和 57 年度京都市内遺跡試掘立会調査概報』京都市文化観光局
- 京都市埋蔵文化財研究所 1986 『栗栖野瓦窯跡発掘調査概報』昭和 60 年度
- 京都市埋蔵文化財研究所 2010 『灰方窯跡・灰方の塚跡・南春日町片山遺跡・勝持寺旧境内』
- 国立扶餘文化財研究所 2007・2014 『王興寺址』Ⅱ・Ⅴ
- 古代学協会 2020 『石作窯・小塩窯発掘調査報告—平安期緑釉陶器・緑釉瓦の多分野協働型研究—』〈古代学協会研

究報告>第16輯

- 齊藤孝正 1989「猿投窯黒笹地区における緑釉陶器生産の展開」『橋崎彰一先生古希記念論文集』真陽社
- 陝西省考古研究院ほか 2007『法門寺考古発掘報告』文物出版社
- 高橋照彦 2003「平安京近郊の緑釉陶器生産」『古代の土器研究—平安時代の緑釉陶器・生産地の様相を中心に—』古代の土器研究会
- 高橋照彦 2019「平安京周辺における緑釉陶器生産—石作窯の特質をめぐって—」『シンポジウム「京の翠とわざの粹—緑釉陶器と緑釉瓦」』京都府・京都文化博物館・公益財団法人古代学協会
- 高橋照彦 2020「洛北・本山官山遺跡の基礎的検討—石作窯成立前夜の様相—」『石作窯・小塩窯発掘調査報告—平安期緑釉陶器・緑釉瓦の多分野協働型研究—』古代学協会
- 高橋照彦 2024「器種の消長」「総括」『篠窯跡群西山1号窯の研究』大阪大学大学院人文学研究科考古学研究室
- 高橋照彦・我妻佑哉 2024「篠窯跡群騎馬ヶ谷9号窯近傍採集の近江系緑釉陶器」『篠窯跡群西山1号窯の研究』大阪大学大学院人文学研究科考古学研究室
- 鎮江市博物館・陝西省博物館編 1985『唐代金銀器』文物出版社
- 日進町教育委員会 1984『愛知県日進町株山地区埋蔵文化財発掘調査報告書』
- 寧波市文物考古所 1997「浙江寧波和義路遺址発掘報告」『東方博物』杭州大学出版社
- 坂東善平・木村孝雄・武山峯久 1970「幡枝町発見の平安時代の須恵器窯址」『古代学研究』第57号
- 平尾政幸 2003「小塩1号窯」「小塩2・3号窯」「小塩4号窯」「小塩5号窯」「大向1号窯」「大向2号窯」「天仏講池窯」「明治池窯跡」『古代の土器研究—平安時代の緑釉陶器・生産地の様相を中心に—』古代の土器研究会
- 前川 要 1989a「平安時代における緑釉陶器の編年的研究」『古代文化』第41巻第5号
- 前川 要 1989b「平安時代における施釉陶磁器の様式論的研究（上・下）」『古代文化』第41巻第8・10号
- 百瀬正恒 1986「平安時代の緑釉陶器—平安京近郊の生産窯について—」『中近世土器の基礎研究』Ⅱ
- 熊海堂 1995『東亜窯業技術発展と交流史研究』南京大学出版社
- 吉田恵二 1983「陰刻花文私考」『坂本太郎博士頌寿記念 日本史学論集』上巻、吉川弘文館（後に、2019『日本古代の窯業と社会』六一書房に所収）
- 吉村正親 1981「明治池古窯の発見とその遺物」『史想』第19号、京都教育大学考古学研究会

挿図出典一覧

- 図1 左図は〔大阪大学2012〕fig.108を大幅に改変。右図は国土地理院地図を下図にして、〔百瀬1986〕〔京都市埋文研2010〕〔古代学協会2020〕ならびに京都府遺跡マップをもとに作成。
- 図2 〔百瀬1986〕〔京都市埋文研1982・1983〕を参照しつつ〔平尾2003〕をもとに筆者がレイアウト。
- 図3 〔古代学協会2020〕の市川創氏作成図をもとに筆者がレイアウト。
- 図4 〔京都市埋文研2010〕をもとに筆者がレイアウト。
- 表1 〔高橋2003〕を基礎に〔高橋2024〕〔高橋・我妻2024〕などの知見を加え、筆者作成。
- 図5 1・5・6：〔鎮江市博ほか1985〕、2・3：〔寧波市文物考古所1997〕、4：〔陝西省考古研ほか2007〕。
- 図6 〔古代学協会2020〕をもとに筆者作成。
- 図7 1：〔熊1995〕、2：〔国立扶餘文化財研究所2007・2014〕。それぞれ一部に追補改変。

（大阪大学大学院人文学研究科教授）

Green Glazed Pottery Production at the *Rakusai* Kiln Group near the Japanese Capital in the 9th-10th Centuries

by

Teruhiko Takahashi

This paper aims to elucidate the historical situation of green-glazed pottery production in the *Heian* period, focusing on the *Rakusai* kiln group near *Heian-kyo*, which has not been sufficiently studied, and I attempt to examine various basic aspects of the *Rakusai* kilns.

First, the relationship between kiln structure and production content was reexamined. The *Haikata* kilns in *Rakusai* were thought to have fired only unglazed wares because of their climbing kiln structures. However, it can be concluded that green-glazed pottery was also fired in those kilns, based on other similar examples.

Next, I addressed the issue of the chronology of the kilns. By reviewing previous studies and analyzing the relationship with other kilns in the vicinity of *Heian-kyo*, I clarified the process of kiln formation.

In addition, I pointed out that the engraved decorations and vessel shapes of the *Rakusai* green glazed wares did not share the same characteristics as those of the *Sanage* wares, and argued that several types of Tang Dynasty gold and silver wares were directly introduced as models when the *Rakusai* kilns were established.

Lastly, I mentioned the establishment of the gray and solid base of wares and small kilns with two fuel holes as elements characteristic of *Rakusai*. The former was assumed to be due to the trend toward celadon from China and the demand for hard wares that could withstand daily use. As for the latter, I pointed out that information from China and the Korean peninsula had been introduced.